

物象化の浸透とその拡大の基盤

－ 金融浸透型成長体制の理論化のために －

高 倉 泰 夫

Abstract

Recent accumulation regime in the USA is called finance-led growth regime by French regulationists, but this concept is a little bit small because we need more comprehensive approach to characterize the latest stage of capitalism. This paper provides new concept as finance-infiltrated growth regime and along with this intensified circulation of money capital. The latter can account major characteristic of capitalism today .

Keywords: regulation theory , reification of production relations , finance-infiltrated growth regime, finance-led accumulation regime, intensified circulation of money capital, financialization,

はじめに

本稿では、レギュレーション理論による1980年代以降の資本制経済を「金融主導型蓄積体制」ととらえる視点を参考にしながら、『資本論』の物象化論の視点を援用したそれをより発展的にとらえつつ、そして資本循環論をも射程に入れながら、1980年代以降の資本制経済を「金融浸透型成長体制」ととらえてこの新しい成長体制の特徴づけを試みる。

1 「信用の基本規定」からみた金融主導型成長体制あるいは金融浸透型成長体制

マルクスは『資本論』の最終篇を生産諸関係と分配諸関係の物象化の総括

を行うことで終了させている。それは、分配諸関係の修正で生産諸関係の修正をなしうるとしたJ・S・ミル批判でもあった。ここで、生産諸関係 分配諸関係というマルクスの経済学の基本は変わらないにしても、最近の1980年代以降の「金融化（financialization）」といわれる現象の中で、分配諸関係が株式の所有関係を通じて生産諸関係に大きな影響を与えるようになってきている。あるいはマルクスは、『経済学批判要綱』以来、「信用の基本規定」を「流通空費の節減」と「資本蓄積の加速」として、すなわち生産諸力の発展への貢献に求めてきたのに対し、現在では平常の状態のもとでも実物資本の蓄積にとって、あるいは生産諸力の発展にとって必ずしも正の効果を持つとばかりは言えない事態が生じている。

最近の金融主導型成長体制では、物象化の進展と相伴う利潤請求権としての株式に基礎をおく資本所有の側面が強調された貨幣資本家の行動は、資本蓄積を促進するものとしての信用とは別の資本信用の側面が所有そのものに即してあらわれてきている。すなわち、貨幣資本家の行動において資本所有の側面が強調されることによって、資本所有と現実資本の蓄積との関連が社会全体としては見えにくくなっている。あるいは、資本蓄積にとっての株式の意義は些少あるいは負であり、株式の支配証券としての側面が強調されることとなっており、利潤証券としての側面はその支配証券としての株式を支えるものとなっている。そしてそれは、G G のG...G への浸透を示している。

そこでは、資本所有およびそれを代表する諸個人の行動が結果として、その貨幣資本の運動を通じる社会的剰余の配分に際して、資本蓄積に対する効果よりも剰余の配分による労働者階級以外の諸階級の維持とその発展に寄与するものとなっている。

このように、物象化の進展とともにあった金融浸透型成長体制は、資本制経済の発展に対して正の効果を持ち続けているとばかりはいえない側面を見せている¹⁾。その点で20世紀後半からの信用制度と再生産過程との関連は、

マルクスの想定していた射程の外に広がってしまったといえる。

そして、重層化した物象化と物象化の浸透とは相即して生じている。同時に、重層化した架空資本の一層の架空資本化としてサブプライム問題は生じていた。すなわち、『資本論』第3部の信用の世界での物象化の規定のより一層の発展として、1980年代以降の「金融化」あるいは金融主導型成長体制そして金融浸透型成長体制がある。

- 1) 金融化あるいは株主資本主義が、実物資本の資本蓄積に対して負の効果を及ぼしていることについては、James Crotty の研究(“ The neo liberal paradox : the impact destructive product market competition and ‘ modern ’ financial markets on nonfinancial corporation performance in the neoliberal era ”, {Gerald Epstein[ed.][2005]所収)や、Özgül Örhangaçi (2008a)および(2008b)の研究を参照。

2 新しい物象化と重層化した物象化のなかでのサブプライム問題そして資本制経済の新しい次元

サブプライム問題の発生は、現在の「金融主導型成長体制」あるいは「金融浸透型成長体制」が、金融技術の発展と相伴う新しい物象化の進展と浸透とともに存立していることと相即している。それは、新しい物象化構造の中で新しい金融商品を創出していく時に、新規の金融商品のなかに既存の商品の新しい形態での再編をも含んで、すなわち、新規の分野の開拓による新商品の創出と並んで、自己言及的な形でのさらなる金融商品の開発をすることもなったのである。それはそれまでの架空資本の一層の架空資本化といえる事態であり、物象化の重層化によって貨幣資本の運動部面の一層の拡大が生じているのである。ここでは、金融技術の発展の中で、それによって生じた架空資本の拡張それ自体が、それを再度大規模に架空資本化していくことで可能としたのである。そして、この架空資本の架空資本化が進めば進むほど、その脆弱性は強まりうることとなる。

すなわち『資本論』第3部の信用論で示唆的に言及されていた株式などの金融商品についてみると、現在では金融技術の発展に沿ってそのような金融商品の諸相が現在より拡大した形での架空資本化として現れているのである。そこでは『資本論』の世界とは異って、その基盤として「新しい物象化」があり、そこで架空資本の一層の架空資本化が進行しているのである。すなわち、この事態の基底には、現在の金融においては金融技術あるいは金融工学の発展によってリスクと収益との関係においてさまざまな面で金融商品を関連付けつつ作りだしていること、またそれと同じことであるが金融機関の垣根が低くなってしまったことがあり、またそのこととさまざまな金融商品が作り出されていくことは強く関連しており、また同時に製造業などの非金融的な企業と金融的企業あるいは金融市場との関連がより密接になってその連鎖性が強まっていることを見ることができる。それは、企業会計における時価会計などに見ることができ、またそのことと関連してG...G がG-G を通じて表現される配当重視あるいは株価重視の経営という形でも見ることができる（株主資本制 vs. ステークホルダー型資本制）。それは、金融市場におけるG-G がより強い形でG...G に作用しているということでもあるが、それは単に支配証券としての株式を通じての支配力がただ強化されているというだけではなく、G...G は時価会計などに見られるように金融市場寄りとなってきている、すなわちG...G とP-P とがより密接にとらえられるようになってきている会計制度などの変容も、そのような作用の現れである。このように、金融主導型成長体制あるいは金融浸透型成長体制は、金融技術の発展においてだけでなく、資本制経済の中でのその制度全体に及ぶ変貌あるいは変質として捉える必要がある。

む す び

以上のような株式会社における資本信用の変貌や新しい物象化における物象化の重層化は、資本制経済におけるG-Gの一層の優越としてとらえる

ことができよう。すなわち、資本制経済を $G...G$ と表現される貨幣資本循環において特徴的にとらえたのはマルクスであった。20世紀末からあらわれてきた新たな貨幣資本循環の優越は、マルクスが特徴づけた貨幣資本循環をさらに上回って $G - G$ の $G...G$ との新たな絡み合いの中での $G - G$ の優越性ということである。

このような20世紀末から21世紀初頭にかけての新しい物象化と相まった貨幣資本循環の優越性は安定的であるという判断は早計である。しかし、この新しい段階での貨幣資本の優越のもとで、 $P...P$ そして資本蓄積はこの強まった $G...G$ を通しておこなわれるのであり、それに引き寄せられた形で資本の運動は理解される。生産諸力の発展は、このような $G - G$ と $G...G$ との新しい形での複合を通じて行われる。

金融主導型成長体制あるいは金融浸透型成長体制は、現時点ではこのような貨幣資本循環の他の資本循環あるいは再生産過程に対する優越性においてとらえることができる。

金融商品の評価に端を発した時価会計が企業価値の評価についても金融市場での企業の市場価値との関連との連続性において見られるように、 $G...G$ と $G - G$ との関連がより強められるなかでおこなわれている。すなわち、新しい物象化は金融市場だけではなく、企業の評価などを通じて我々の周辺により深く浸透している。そして、それは生産諸関係の物象化の表現という点からみると、『資本論』のそれとは質的にある程度異っているのである。

< 参 考 文 献 >

- ・大澤和人『サブプライムの実相 詐欺と略奪のメカニズム』商事法務，2007年。
- ・奥村宏『エンロンの衝撃 株式会社の危機』NTT出版，2002年。
- ・木下悦二「21世紀初頭における金融資本主義とその挫折 信用デリバティブに焦点を当てて」(上・下)『世界経済評論』，52巻9，10号，2008年9～10月。
- ・倉都康行『投資銀行バブルの終焉 サブプライム問題のメカニズム』日経BP社，2008年。
- ・鈴木芳徳『グローバル金融資本主義 ドル離れとサブプライムローンの深淵』白桃書房，2008年。

- ・春山昇華『サブプライム問題とは何か アメリカ帝国の終焉』宝島社(新書), 2007年。
- ・みずほ総合研究所編『サブプライム金融危機 21世紀型経済ショックの深層』日本経済新聞出版社, 2007年。
- ・本山美彦『金融権力 グローバル経済とリスク・ビジネス』岩波書店(新書), 2008年。
- ・リチャード・ビトナー(金井真弓訳)『サブプライムを売った男の告白 米国家宅金融市場の崩壊』ダイヤモンド社, 2008年。
- ・Assassi, Libb, Anastasia Nesvetailova and Duncan Wigan(eds)(2007)*Global Finance in the New Century: Beyond Deregulation*, Hampshire, UK and New York, USA, Palgrave Macmillan.
- ・Bischoff, Joachim(2006), *Zukunft des Finanzmarkt-Kapitalismus Strukturen, Widersprüche, Alternativen*, Hamburg, VSA-Verlag.
- ・Coriat, Benjamin, Pascal Petit and Geneviève Schmedder(eds)(2006)*The Hardship of Nations: Exploring the Paths of Modern Capitalism*, Edward Elgar.
- ・Duménil, Gérard and Dominique Lévy (translated by Derek Jeffers) (2004), *Capital Resurgent: Roots of the Neoliberal Revolution*, Cambridge, USA and London, UK, Harvard University Press.
- ・Epstein, Gerald (ed.) (2005)*Financialization and the World Economy*, Cheltenham UK and Northampton, USA, Edward Elgar.
- ・Foster, John Bellamy, “The financialization of capital and the crisis”, *Monthly Review*, vol.59, no.11, April 2008.
- ・Orhangazi, Özgür(2008a) *Financialization and the US Economy*, Edward Elgar.
- ・Orhangazi, Özgür(2008b) “Financialisation and capital accumulation in the non-financial corporate sector: A theoretical and empirical investigation on the US economy: 1973 - 2003”, *Cambridge Journal of Economics*, vol.32, no.6, November.

(本稿は、2008年10月26日(日)に行われた「経済理論学会第56回大会(於・九州大学)」での、「共通論題関連(2)」の報告資料「物象化の浸透とその拡大の基盤 サブプライム問題への接近」に若干の加筆・整理を行ったものである。)